

第 8 回 子ども未来応援会議

日時 平成 24 年 8 月 30 日(木) 午後 1 時 30 分より
会場 生涯学習センター 第 1 学習室
出席者 委員
大坪委員長、岡村委員、内川委員、片山委員、金原委員、小山委員、
佐野委員、榛葉委員、大社委員、堀見委員、松永委員、村本委員、
高木特別委員

事務局
教育部長、生涯学習課職員、教育推進室職員

委員長 それでは、第 8 回藤枝市子ども未来応援会議を始めたいと思います。協議も大詰めに入ってきています。今日はお手元にある資料、題名については仮ですが「学びの環境モデルふじえだに込めた思い」から検討を始めます。

事務局 この子ども未来応援会議も第 8 回目ということになりました。特に今年度に入ってから月 1 回お集まりいただきまして、ご協議を重ねていただきましたことに心から感謝しております。

本日は今まで話して頂いたことをまとめる会合という位置づけでお願いをしたいと思います。この後、数ヶ月間休会をさせていただいて、その間に私たち事務局で教育振興基本計画の編集作業に入らせていただきます。

皆様方のお話を受けながら学ばせて頂くことが大変多いのですが、基本計画というものは行政が作る冊子ですので、ありきたりなものになりやすい面があります。皆様の思いや皆様のご意見を無駄にしないために何か方法がないかと考えたことの 1 つに、資料の 7 ページ「学びの環境モデルふじえだに込めた思い」があります。先ほど話がありましたとおりタイトルについては決定ではありませんが、子ども未来応援会議で話をさせていただいたエッセンスをわかりやすく伝えさせていただこうと考えたものです。これについてご意見いただきたいということが 1 つ目のお願いでございます。

昨日、委員長とお話させていただく機会があったのですが、3 ページにあります第 2 章「目指す藤枝の教育の姿」のところには皆様方にお話いただいた内容を詰め込んだつもりではございます。これを第 1 章に持ってこようと考えているところでありまして、お手元の素案の第 1 章は「計画の策定について」とあ

りますが、第2章と入れ替えまして、基本計画の最初に「目指す藤枝の教育の姿」を持っていこうと思っております。

また、お手元に横長の資料があると思いますが、皆さんのお話の中に出てきた大事な部分だというもの施策として計画を立てております。子ども未来応援会議の内容をどう施策にするか検討しているところでございます。これにつきましても後程ご意見を頂けたらと思います。

委員長 今、事務局から説明がありましたが、昨日少し事務局の方と意見を交わしたのですが、通常こういう基本計画というと三段論法で書いてあって読みづらい。計画の位置づけが最初に来るものですから、これを見ただけで頭にメンタルロックがかかってしまうことになりかねない。ですから、最初から言いたいことを言って、位置づけなどは最後でいいのではないかと提案したのですが、そのことが、事務局の方が言及された内容です。

では、「学びの環境モデルふじえだ」に焦点をあててお話いただければと思います。A委員の方でお気づきの点や、こういう事は参考にした方がいいよという耳よりの話がありましたら挨拶がてらお願いします。

A委員 近々ですと、24日に中教審の教育課程部会が久しぶりに開かれたのですが、その中で少し出てきた話題が2つほど関係すると思います。

1つは「小中一貫」ではなく「接続」とか「連携」という言葉を使い出しまして、小学校教育と中学校教育の連携をどういう風にしていくかっていうことが出てきました。

やはり9年間の義務教育の中で、どういう風に子どもたちを育てていくか内容や学び方のことが話し合われています。たぶん来週にはその会議の中身が文科省のホームページに載ると思います。

もう1つ藤枝に大きく関係するものに特別支援学校の教育で「インクルーシブ教育」誰もが一緒に地域の学校で学ぶというのがこれから大きな課題になってきております。「インクルーシブ」という言葉は中に入っていないが、特別支援教育の充実ということで、計画案の全体を拝読させていただいた範囲では今の教育状況に沿った形になっているかなと思えました。

昨日、小田原の家庭教育学会に行きまして、やはり問題になっているのは横長の資料で現在検討中の施策の一番下にある「家庭・地域・学校」という書き方なのですね。いろいろな答申見ると大体「学校」が先に来るのです。別の県の教育ビジョンの作成委員会にも参加しているのですが、その中の議論でも、「まず家庭だろう」と学校にいろんな課題が降りかかっていて学校は抱えきれなくなっているのではないかと話されています。

計画案で家庭のことを見ますと、7ページの「学びの環境モデルふじえだに込めた思い」も適切だと思っているのですが、家庭とか地域とどういう風に協力しながらやっていくか、ここが今弱くなっている。特に都市部ではこれが大きな問題になっていて、学校選択制が崩壊し始めている。学校選択制にすると地域がなくなっていくので良い方向ではないと結果に表れてきている。

家庭教育をどうするか。もう少し具体的に突っ込んで話してしまうと、家庭の教育力がなくなっているの、どういう教育を家庭でしてほしいか、どこかで示さないといけなくなるのかなど。こんな話はおかしいのですが、最近良く言われている「早寝早起き朝ごはん」も昔は当たり前だった。朝起きたら親に「おはようございます」と言うのは当たり前、それができていない。そういった状況を全て学校には任せられない。でも、学校の先生はそういうことに対しても一生懸命で、保護者から「うちの子朝起きないから先生起こしてね」と言われると断ればいいのに学校の先生は人が良いから自分が起こしたりする。

B 委員 確かに、家に電話をかけている先生はいます。

A 委員 私の知っている都市部では家まで起こしに行きますよ。朝、先生たちがおにぎりを買ってきて朝ごはんを食べていない子に朝ごはんとして食べさせてから授業する。そうしないと授業について来られなくなってしまう。

それは本当に学校がやるべきことですかっていうことを明らかにしながら、その上で家庭と地域と学校が連携するってシステムを作ればいいのかと思います。

「学びの環境モデルふじえだに込めた思い」については、実現できればいいけど、具体化が難しいと思うのですよ。言っていることはそのとおりだと思います。

C 委員 例えばね、表現上の問題かもしれませんが、3段落目の「子供は大人を見て育ちます」こういう所をもっと藤枝らしくする。藤枝語にすることが大事かなと思います。思いつきで言うと「藤枝の子どもは藤枝の大人を見て育ちます」みたいなね、なるべく藤枝を鮮明に出す。どこでも通用するような言葉じゃなく。

その下の段の「地域ぐるみの教育により地域に対する愛着を深め子供も大人も地域に誇りを持ちます」は「藤枝に誇りを持ちます」というように、藤枝らしい個性豊かな表現にすることが非常に大事だし訴える力も強くなる。

委員長 先ほど A 委員から特別支援教育に関する話も出ましたが、D 委員はどうお考えですか。

D 委員 私も事前に読ませてもらいましたが、広く子どもたちの教育を書いている冊子の文言ですので、あえてここで「障害」とか「特別支援教育」とか言葉を明確に出さなくてもいいですが、それも含んでの施策ですよということが押さえられていて欲しいなと思います。一番上に「一人ひとりの学び大切にします」とある。これも障害がある子もない子も一人ひとりそれぞれの学びを大事にするという意味に捉えたいですね。これを受けて各項に入った時にそういったものがしっかりと押さえられるかなと。中段に「大人がみんなでかかわって、地域ぐるみの教育をします」とあります。これも藤枝は障害がある子もない子もみんな私たちの街の子どもだと捉えて一緒に育てていく、さっきお話にあった障害の有無に関わらず共に学ぼうというインクルーシブ教育や、静岡県の共生教育の理念と共通すると思いますから、その押さえが各所を見た時にあるべきだと思いました。

委員長 この間、私たちの大学で市長を囲んで藤枝市内の高校 8 校の学生がトークするという催しがあったが、藤枝市長は特別支援学校を大事にしたいってみんなの前で強調していました。

私はインクルーシブって知らなかった。そういう意味だというのは教育界だけで使っている特殊な言葉ですよ。普通の人にはわかりません。何で「インクルーシブ」と英語で言うのですか。「含んでいる」という意味ですよ。それだけの意味の単語で、障害者の学習や支援などの意味は一切ないですよ。

D 委員 そういう言葉がここ 1・2 年世界的に言われている。国連の障害者権利条約の中で障害者も通常の学校、地域の学校へ行って一緒に学ぼうとされて、その動きに日本も合わせる方向にある。それを受けて、本当は「インクルーシブ教育システム」と言うのですが長いので省略しています。

委員長 英語を使うのはやめた方がいいのではないかな。僕も反省をしているけど、「サステナブル」持続可能という意味の言葉をみんなに使っていた。我々は環境問題で馴染んでいたのだけれど、一般的には何を言っているのかわからない。

教育の話なので家庭まで考えた時に「インクルーシブ」ってみんなわかっているような振りして本当はわかっていないのではないかな。英語はできるだけ入っていないといいなと思う。なるべく普通の人ができる言葉じゃないと、それこそ拒否反応が出てしまう。

E 委員 先ほどの C 委員の「子どもは大人を見て育ちます」の最初に「藤枝の」をつ

けるという話ですけど、全体として一行目の「藤枝は一人ひとりの学びを大切にします」の次の2・3行目は一般論で、「藤枝」が入っていませんよね。「子どもは大人を見て育ちます」も一般論と言え一般論なので、そこではなく、2行下の「大人はみんなでかかわって・・・」という文に「藤枝」をつける。一般論があって、次に藤枝はこうするよとすると調子が合うかなと思います。

C 委員 前提があってそれを受けて藤枝はと言うのはわかりますが、余分なことは捨てて、主体性を前面に出してはどうかと思う。少し話が違いますが、2ページの計画を説明する図に「国、県、市」があります。矢印で国から県・国から市へとなっているが、そういう思想はやめた方がいい。矢印はやめて、藤枝は藤枝らしくしっかり考えれば、国の施策ともきつといい関係が生まれるはず。県から来たから、国から来たからみたいな今までの思想はやめる。線はいいですが矢印はやめる。私もずっとその現場にいましたが、整合性なんて言葉はいらぬ。

委員長 矢印が逆で市から国にした方がいいのではないですか。

非常に大事なポイントです。我々は上から言われてやっているという意識が強いのですよ。市が独自にやるのだからマネしなさいと、こっちがモデルだよということですね。大いに考えていきたいですね。

E 委員 上からってわけではなく、一般的に子どもは大人を見て育つだろうと、藤枝の子ども他の街に行くわけだし、藤枝の大人ばかり見ているわけではないので、その「大局的な話も分かって言っているのですよ」と書いておかないと。例えば、ひねくれた人を見ると「藤枝ばかりこんなことしてもどうにもならないのではないの」と言う人もいるかもしれない。「そういう事も全部分かっているけど藤枝はこうします」と落ち着いた感じを出した方がいいのではないか。

B 委員 前回に提示されていた文章よりもとってもスッキリして、言いたいことがコンパクトにまとまっているというのが第一印象でした。ですので、あまり言うことはないですが、一番ポイントになるのが「地域ぐるみの教育」という部分で、先ほどA委員が言っておられた「家庭の教育力」も入っているし、学校も入っている。だから、家庭や学校を巻き込む地域ぐるみの教育だということをもう少し強調できたらいいなと。「家庭」という言葉をどこかに入れられればと自分の中で考えていますがアイデアが浮かんでいません。

先ほど委員長が言っておられた高校生と市長が語ったという新聞記事を読みました。その後市長のお話を伺う機会があって、将来・未来について熱く高校

生が語ったことを聞きました。その他にも市立病院で中学生や高校生が薬剤師の体験をしたとか、藤枝で活躍している4人の方で青島酒造さんとかMYFCの小山さんのお話を聴く会を持つなど、地域で活躍している人や地域の会社や団体との関係で中学生や高校生がどんどん体験する。そのようなものが広く行われていくことが教育を広げることになるのだなと思いました。

地域の誇りもこうした地域での体験を結ぶことがそれに繋がっていくのではないかと思います。

委員長 F委員は先ほどの議論聞いてどんな印象ですか

F委員 この「学びの環境モデルふじえだに込めた思い」には、この会議で話し合われた事が分かりやすく書かれていると思います。「宣言」とか「誓い」になると思うのですが、下の方に「つなげることに努めます」とありますが、「誰が」ということがね。こういう文章って憲法の条文でも何でも素晴らしい言葉で書いてあって、ここに「誰が」というものを思い浮かばせるようなものがあればね。藤枝のみなさんがこれ読んで「誰が」ということが浮かぶのか。

一番大事なのは誰がこれをやるのかってところなのですよ。現実と繋がっていくものがあれば素晴らしいですがね、問題はこれからだと思います。文章自体は素晴らしいと思いますので特に言うことはないです。

委員長 今後の実行と施策の展開とを予想して考えなければということですね。なかなか、言うは易しだが行うはということですね。

G委員 この「大人もみんながかかわって地域ぐるみ」でというところが本当にいいなと思います。前回の会議でPTAの話が出てきたのですが、PTAという組織であれば学校の中に立ち入って何かできるのかなと強く感じている。それをきっかけに何かできたらいいのではないかなと。でも校長先生・教頭先生の考え方で変わってきてしまうっていうのが強いので、繋げる人材の選任から考えていけばスムーズに入っていけるのかなと感じました。

委員長 誰がどうやってやるかっていうのは今後の大きなテーマになりますね。

H委員 第2章「目指す藤枝の教育の姿」の最初にある「笑顔あふれる教育」と「学びの環境モデルふじえだ」の繋がりが、「笑顔あふれるまちを実現する」とはあって、「楽しい」ってところで繋がると思うのですが直接的に繋がってない。基本理念の一番大切なものに「笑顔あふれる教育」って書いてあるものです

から、楽しいから笑顔になるというところもこの文章の中に入れて全体的にまとまるのではないかと思います。

この「学びの環境モデルふじえだに込めた思い」自体はこの会議で話し合った内容が入っていて、わかりやすく書いてありますし、いいのではないかなと思います。

I 委員 私も前回のよりすっきりしていて非常によくなっているんじゃないかなと思います。当初から話しているように難しい言葉を使わずできるだけ優しい誰が見てもわかる様な表現をしようってことがうまく込められていてこっちの方がいいかなと思います

J 委員 第2章「目指す藤枝の教育の姿」は私もすごくスッキリして良く分かる内容になっていると思います。大変だったと思いますが頑張ってまとめられていると思いました。

「学びの環境モデルふじえだに込めた思い」のところを読んでいて、いいなと思いながら「見て聴いて感じて体験する学びがある」とか「楽しい学びの場がたくさんある」というのが今どこにあるのだろうか、これからどうやっていくのかなと思いました。

やっぱり、学校の中に地域の人が入っていないとすごく感じたのですが、中学校の先生はすごくお忙しくて余裕がなかったりすると部活が土曜日も日曜日もできないこともある。そこで保護者が「なぜ」と言いますと「家族の介護をしなくてはいけなくなった」とか、また違う先生になると一生懸命になったり、先生によって子どもが右往左往することになっている。そういう話を聞くと、保護者の中から誰か責任を持ってとか、地域の中から僕がやるよって言うてくれる人がいて、学校の中で活動することができれば、もっと一貫したことができるのかなって感じて、どんどん地域の人が学校に入っていくようになったらなと思います。

委員長 部活って先生が顧問をしているのですよね。部活と先生の関係は日本独特なのですか。

A 委員 そうです、日本しかやっていません。

委員長 なかなか面白い教育方法だと思うけど、やっている先生はどう思っているのですかね。

A 委員 いくつか先生によって受け止め方があるのですが、1つは生徒指導上部活をやっていた方がいいという先生。それから自分の得意な種目がある先生はなんとかそれをやろうという先生。部活をやることによって日常の子どもたちとの関係が良くなる、これは生徒指導にもつながるのですけどね。あとは仕方なしにやっている先生。前にここで E 委員とお話したのですが教育課程を調べたらやっぱり教育課程には戻ってなかったですね。教育課程外ですね。

今はある意味で先生の半分奉仕のような形でやられていて、社会体育へ移行した方がいいのか何とも言えない非常に難しいところ。どっちつかずの現状のいい面もないわけではない。保護者の中でも、熱心にやってほしい人と、土日までやらせるなんてと文句言う人もいて、意見が分かれる。

一時期、社会体育への移行が進んだ時期があったが、それで大変成功したのが日本サッカー協会。藤枝でもスクールができて地域スポーツとしてできている。

E 委員 部活がスポーツを強くする方法の一手段になっていて、高校野球とかそうじゃないですか、あれで強いとプロに行けるという道ができています。サッカーは地域密着型のクラブチームができたので今は部活のサッカーでもクラブチームのサッカーでもプロになれる。私の子どもが通う中学校でもクラブチームに入っている子は部活にも登録はするが、クラブチームで一生懸命やっていたらいいとなっている。

J 委員が言われたように先生によって子供の部活動の様子が左右されてしまうことが保護者から見ると可哀想ということはある。一生懸命やってきたのに先生が変わるとスタイルが全く変わってしまうというのも可哀想。

それから部活がやりたくて先生になる人もいるのですね。その先生が自分の希望通りの部活を受け持てればいいのだけど、校務分掌の関係で違う部活になる場合もあり、そうなる则ちかなりテンションが落ちてしまい生徒にも影響がある。本当ならば、先生は学校で何をするべきなのかについてもっと精査してもいいのではないかなと思います。

部活によって学校が有名になってということが特に私学には良かったってことになるし、子どもたちにいい影響もたくさん与えているので、どういう方向がいいのですかね。

委員長 今、部活の顧問という仕事は、先生の本来業務ではないのですね。仕事以外のことをしていると捉えていいのですか。

A 委員 本来業務ではないです。ただ、生徒指導という面もありますので学校生活一般

を見ていく中では仕事に入っていると言える。

委員長 カリキュラムには入っていないのですね。

A 委員 入っていません。

K 委員 「学びの環境モデルふじえだ」を読んだ時に私でもすんなり入るような内容になっていて大変わかりやすいと思いました。小学校の高学年とか中学生が読んでも入る内容なのではないかと思います。

これを読ませてもらって思ったことですが、子どもたちは自分の学びというのを自分の中で切磋琢磨して深めていく力が弱いと思うので最初の行の「一人ひとりの学びを大切にする」という所は大事なのでいいなと感じました。

前回、B委員が言われましたが、地域の前に家庭の力と、親としては耳が痛いのですが、親の力が弱まっているというところで「家庭」という言葉が入ると親が地域に目を向けていって、親の姿勢で子供が学ぶという。「家庭」という言葉があるとさらにいいなと感じました。

藤枝とか地域に対する愛着心があるのかと考えた時に、私の世代から薄くなっているのではないかとすごく感じるのです。愛着を深めるためには、子供たちが地域のいろんな人たちと関わりを深める。そのなかで自分さえ良ければいいのではなくて、周りに何かしてあげたいということから交流が始まることで愛着心が湧いてくるのではないかな。まずは大人が自分さえ良ければいいという考えではなく自分の子ども以外の子どもにもっともって目を向けていく姿勢を築いていかなければならないと凄く感じました。

委員長 さっきご紹介した藤枝市長と高校生の会話の中で高校生に「静岡県の大学へ行きますか」と聞いて「はい」と答えた人は全くいませんでした。では、「将来藤枝に戻って来ますか」と聞いたら「はい」と答えた人は1人。「こんないいところだから絶対に戻って来て藤枝市のために尽くします」という子が1人いましたが、はっきり言わないが帰って来たくない感じの子がほとんどで、「藤枝には魅力がない」というような表現をした学生もいました。自分が育った場所を大事にするという気持ちも変化しているのかな。愛郷心がないと自分が育ったところを素敵だなと思わないとなかなかいろんなことが進まないのではないかとそんな問題を感じましたね。

L 委員 「学びの環境モデルふじえだに込めた思い」の中で「大人がみんなでかかわって」という「みんなで」という表現が実際にやっていくことを考えるとあり得

ないことなので、「みんなで」というのは削除してもいいかなと。これを逆手にとって「みんなでやってない」と言われると何も言い返すことができない状況が考えられるのでそれはなくてもいいかなと。

また、「家庭という言葉」という話がありましたが「学びの基本は家庭の中にある」と1文入れるといいのではないか。「基本は親なんだよ」という意味を込めた文章を載せていただけるといいかなと思います。

あと、E委員が言われた「子供は大人を見て育ちます」という文に「藤枝の」という言葉はいらぬという話は、私もそう思います。藤枝以外の大人を見て育つということもたくさんありますから、これは一般的な部分として「藤枝の」はない表現でいいのではないかなと思います。

部活のことに関して話が出ましたが、公立と私立だと考え方が違うと思います。自分がスポーツ少年団の指導を5年やっていた経験から言うと、毎年毎年子どもたちに、その年のチームの目標を考えさせて出させました。たまたま1年目のチームは「静岡県で一番強いチームになりたい」と言った。最初は「無理じゃないか」と言ってもう一回考えさせたが、「それでも一番になりたい」と言ったので、とにかく厳しい練習やるぞと言って1年間やりました。結果、静岡県で1番になりました。2年目のチームは目標決めて来いと言ったら、「県大会でベスト8に入れるチームにしたい」と言った。とても優勝目指せるメンバーではなかったこともあります。3年目の時は「勝ち負けも大事だけど楽しくやりたい」と言われました。私は子どもたちの目指すチーム像に合わせて指導の仕方を変えていきました。公立の学校とスポーツ少年団はそういうやり方がいいのだろうと思います。でも、私立は「とにかく勝つぞ」って、それを分かっている子が入って来ますからそれはそれでいいのではないかなと。公立の場合は私のようなやり方でいいと思いました。納得したら厳しい指導でもみんなついてくるのですよ。目的がハッキリしているから。

委員長 今、話を聴いていると、「部活」は日本の教育の特色だし、藤枝は部活教育が日本一でもいいのではないかなと思いました。どういう風にやるかは考えなきゃいけないですがね。書道の部活とか、俳句だって部活があるわけだし、そういうのは総合教育。藤枝は剣道の街ですよ。市長も剣道7段。教育としてどうするかはいろんなアイデアがあると思うけど、そう考えても1つの特色としてあるのかなと。

大学にいますと「部活」ってすごく重要だと感じるのです。産業界で成功している人って大学で習ったことをやっていない。みんな趣味と実益が一致している人が一番いいのですよ。部活は終わったら趣味になるのですよね。うちの大学の歌を作ってくれた小林亜星さんは慶応大学医学部に行ったのですが、音

樂やりたいから経済学部へ転部した。大学に行ったのは音楽やりにいった。

教育は本来は趣味の方がいい。そういう教育の仕方はどうなのかな。科学者も趣味と実益が一致している人が多い。先生になりたい子は子どもの時に先生ごっこをやって先生になるし、藤枝の特色として「部活が楽しいは人間を創るまち」っていいと思ったのですが。趣味でやっている人が成功しているし、教育を仕事としても趣味としてもやっている人が一番いい教育をしますから。

E 委員 いわゆる勉強以外みたいなものをどう提供するかという時に、部活だと学校でそれもやりますよというやり方、もし〇〇小学校書道日本一とかではなく、藤枝の〇〇地区は書道日本一なら公民館でやることも考えられるなど方法論になる。剣道を日本一にするんだという時に参加団体を学校単位にするのか地域団体にするのか。少子化で子どもが少なくなると学校にいる先生の数も少なくなるので、部活を掛け持ちになったりして一人の先生の負担が増えてしまう。だからマンモス校の方が部活は強くなるという面があるようです。そういう中で「部活で」ということを打ち出すとなると、今までのやり方で想像した時に悲鳴を上げる先生もいるし喜ぶ先生もいる。やっぱりどう提供していくかという仕組みの具体化がカギになってくるのではないですか。

委員長 なかなか難しいテーマですね。

M 委員 いくつかあるのですが、一番初めに委員長が提案された第2章「目指す藤枝の教育の姿」を前に持つてくるという話。基本計画一般の共通ルールがあるのかもしれないが、子ども未来応援会議で議論した方向から考えれば、最初にそれがあってわかりやすくハートを掴むという意味でとても素敵だと思いました。また、この文章はひらがなが多くて、字を覚えてたての子どもでもわかるなと思います。

「学びの環境モデルふじえだに込めた思い」で言うと、3行目がとても印象的で「楽しみながら学ぶからこそ確かな力になります」という部分の「楽しみながら学ぶ」ということは私の教育学の分野を含めたいろいろなところで議論がなされています。「学びの環境モデルふじえだ」とした中で、なぜ1段落目にこれを示しているかといえば、この会議での議論が基本的な人格の形成にあって、その学びの方向がこの1段落目の3行に表れていると思います。

教師はすごいことを問われていると思うのです。小中学校でもいろんなタイプの子がいて、特別支援学校や学級に入らないグレーゾーンの子どもたちがいる中で、「学ぶことが楽しくてたまらない」という授業を作っていこうと問われている。今までの教育方法ではなく、みんなが楽しく、A委員がおっしゃった

インクルーシブ教育。この専門性を持つ方が正直ずっと難しいですよ。それを最初の3行に謳ったというのは素晴らしいと思っています。学校の先生たちにこの視点での実践をうんと深めていって欲しいと思います。

それから、一番基礎のところ、愛・信頼感という家庭の教育の問題。いじめの例で言うと、いじめで傷ついた子を不登校にするのではなくて、いじめている子を家庭に戻して家庭の愛によって復活して戻ってきてもらいたいと思う。人間が生きていく上での最初のモデルは家庭にある。でも、その家庭がモデルにならなくなっている。それを今どこでやっているかという幼稚園・保育園・子育て支援センターです。私の関係している子育て支援センターで、2才児の子が持ってくるお弁当を開けたら、さくらんぼの種が取られてスライスして入っていた。トマトも全部種を取ってスライスしてある。お母さんはそれを愛だと思っている。

種を取るのが大変なら子供が保育士にお願いするというコミュニケーションの始まりがある。トマトを口にしたら種の部分がピュって飛びだしてしまう、それが許されない、失敗が許されないのですよ。子供は経験して大人になっていくのです。自転車も転んで乗れるようになる。どうして転んじゃったのかを考える、幼児期にいっぱい失敗の経験をした方がいい。だけど足蹴にされて転んだら心が傷つく。そういう教育では子どもは育たない。それは絶対にきちんと伝えてかなきゃいけないこと。

教育力を持っている家庭もあるが、減ってきているのを地域が下から繋がって支えて子どもを育てようと、それには藤枝の人みんなの力が必要なのだと言うわけですから、一番最先端の乳幼児期のところである家庭教育のところについてもう少し文章があるといいなと思う。

それから、子供が育っていく環境は人的環境と物的環境がある。人的環境のことは言っているけど、藤枝はすごく豊かな自然があって、それは社会に出て戻ってきたくなる魅力だと思う。素敵な人との出会いや魅力ある企業もなければリターンして来ないとは思いますが、藤枝は自然がこんなに豊かであるということが一言入っているといいなと思いました。

最後に施策の「幼児教育の推進」のところこの文章と全部を読むと受け取り方は違うかもしれませんが、やっぱり事例として「小1プロブレム」を出すと、小学校が困らないためにと言われている気になる。やっぱり幼児期は感性・感覚の時期で、経験を通して認知するという教育スタイル。座って読み書きをして認知する教育スタイルとは違うので、ここだけ読んでしまうと小学校で困らないようにと受け取る幼稚園もあると思う。ちょっとこの事例の出し方は疑問に思いました。

委員長 今、M 委員の話聞いて思ったんですけど、日本では「愛」ということを教えるのですか。愛するとか愛とか。

M委員 愛するっていうのは教育の場面で言うと、あなたの考えている、思っていることを一旦は共感するという事が愛だと思う。愛されているという感覚がないと、人を愛することはできないので。

委員長 「愛」の教育って難しいけど大事だと思ったのですよ。キリスト教の社会ではお母さんが子どもに「I love you」とはっきり言いますよね、「愛してる」って。でも、日本では言いませんよね。親があなたを愛しているなんて言ったら変なことになる。

A委員 大学の研究で気をつけなきゃいけないのは、日本の学問ってヨーロッパ至上主義なのです。欧米先進国至上主義で向こうのものをすぐに持ってくる。最近で言うとバスの中もそうなのだけど、キリスト教の考えがみんな背景にあるわけですよ。私は、日本は日本でいいと思うのですよ。

委員長 そうですね。日本で「愛」というのを教えるにはどうしたらいいですかね。

E委員 家庭教育で教育社会学の先生が昔から家庭教育の4つの機能と言うのですが、その中で一番に挙げるのは「愛情の感覚を身につけさせる」。それは言うのではなくて行動としてで、世話をすると子供を大切に思うこと。どんな汚いおしめでも換えるし、様子を見て食べられるものを考えるとか行為にそれが含まれているのだからよって学生には家庭学の4つの中の1番目に教えます。だから I love you っていういいなさいではないと思う。

M委員 赤ちゃんがお腹空いたり抱っこして欲しくて泣いた時に、親は携帯電話を触っていて抱いてもらえない訳ですよ。抱っこして欲しい、構って欲しい、お腹が空いたって時に抱かれたり世話をされた子は「自分は泣いてもいいのだ」って自己肯定感の基本的な部分が育っていくわけです。

委員長 うちの大学の理念に人間愛を入れてあるのです。物を大事にする草木を大事にするこれも一つの愛情と言うべきじゃないかと思うのですよ。大事にするとか、尊敬するとか、尊敬するとかも世の中では愛ですよ。教育の中には愛ってちゃんと入っていますよね。

A委員 　だから、いろんな言葉もそうなのだけど日本語には「愛」という言葉の意味するものが多義的にあるのですよね、言葉自体の中に。そのままイコール愛と訳せるタイプもあるし、それとは違って「愛おいしい」とか「可愛がる」とか「大切にする」とかもある。

委員長 　そういう心の問題をもっと大事にしなきゃいけないと思うのです。それをどのように表現するか。幅広く取り入れようとすると、それだけで1ページになってしまう。

　障害者の教育をされている方は愛がなきゃできないですよ。気持ちの上でもすごい。あれは愛情がないと本当にできないと思う。

A委員 　ちょっと1つ後段で感じたことがありまして、6ページの学校の教育力なのですが、日本の教育って世界の中でもとっても優れていると思っていますし、それを支えているのは教師だと私は思っています。

　8月6日に全国学力学習状況調査が行われまして、あれは一部のメディアの報道では「学力テスト」と言っていますが、「学力テスト」ではなく「調査」なのです。報道で煽られて序列つけたりしているのは違うなと思っています。

　あれは今から6年前に始まっているのですが、なぜ始まったかと言うと、用語解説に「ピサ」とありますが間違いで「pisa」と書いて「ピザ」です。「Reading literacy」と書いて「ピザ型読解力」と訳しています。このピザ型読解力の調査が世界的に行われた時にある典型が出まして、日本の子どもたちは自分の考えを書くことができないですね。記号式で選ぶのは得意なのですが、自分の考えを図や表を見て書きえないさと言って言うと白紙になるのですよ。2000年にその結果が出たのですが、この学力では困るということで、その学力を変えてもらいたいという思いで全国学力学習状況調査が始まったのです。

　全国学力学習状況調査にはA問題とB問題があつて、A問題はいわゆる漢字を書けたり算数の計算ができたりっていう事ですが、B問題は図や表を見て自分の考えと比べて意見を書きましょうという問題。ところが6年たってもB問題の成績が上がってこないのです。どこに原因があるかという、これは私見ですけれども、学校の授業が変わってないからです。10年前と同じ授業を繰り返しているからです。これからの時代にはそうした学力が必要なのですが、学校教育の中で育成されていないのです。

　先生たちは同じこと繰り返しても気づきません。例えば国語の授業で言うと日本中の学校で物語の場面を区切りながら授業をやっています。1場面はこう、2場面はこう。これは40年前の授業なのに平気で行われている。

　学校の教育力と言った時に、これからの時代に必要な学力を育成するための

授業のあり方を抑えておかなければならない。藤枝はいくつかの学校で「聴いて、考えて、つなげる」という授業を始めました。もう止めてしまう学校も出てきてしまいましたけど、少しずつ広がっています。例えば大阪とか和歌山でもそうした授業をする学校がどんどん出てきています。ある意味では藤枝はフラッグシップなのです。授業改善なんていう生易しいものではもう対応できないのだと思います。もう一回ここで学校の授業を問い直す必要があります。

私は「目指せ教育日本一」がちっとも大げさだと思っていませんが、それを進めていく時に授業のあり方について藤枝から発信されるということが良いことかなって、是非学校の授業そのものを今までの授業と大幅に変えるという考えを持っていただきたい。

委員長 大賛成ですね。

A委員 なかなか変わらないですよ。

委員長 実感しています。なんで変わらないのですかね。

A委員 例えば、今回不幸なことに大津市のイジメの問題が起きましたが、そうした時にテレビのコメンテーターいますね、保護者もいますね、日本では全員が教育を受けていると言ってもいい。そうすると自分の体験や経験を元にしてしか語らない。原体験論でしか語らないから過去の考え方の枠の中、パラダイムの中で動いているだけで転換ができない。

だから私は先生方にいつも言っているのですが「皆さんは高度な専門職だから、自分の体験や経験ではなくて、その枠を超えた次の時代の目指す教育を考えて下さい」って。だけど、私もある学校とずっと関係してきたのですが、結局その学校は授業を戻してしまったのはなぜかという、自分の昔の原体験の授業に戻ってしまう。黒板に掲示物ペタペタ貼ったりして、そういう授業は止めてくださいって言っているのに、それに苦言を述べていると「もうそういう助言者はいない」という話になってしまう。

やっぱり転換をしていくという前向きな姿勢が必要。先生方にはまず意識改革をしていただきたいなって思います。

L委員 その話って私も大賛成なのですが、文科省がそういう教育を目指しましょうってやっているのですか。

A委員 今の新しい学習指導要領でははっきり謳われています。

L委員 でも、実際には小学校中学校の授業は変わっていないですよ。

A委員 それはそのとおりですね。実は今の教育をやろうとしたのが、昭和 52 年版の学習指導要領で文科省の施策はそれからずっとぶれていません。メディアの報道によって「ゆとり教育」と歪められてしまった。「ゆとり教育」なんて、日本では一回もやったことないです。「ゆとりと充実」だったのを一部のメディアが「ゆとり教育」と取り上げてひっぱられてしまったのです。昭和 52 年から 30 年間やろうとしているのだけど変わらないのです。

L委員 自分が思ったのは学校の先生が試験やって採点するのが楽じゃないですか。社会にしても年号覚えて言葉を覚えて、暗記の勉強でしょ。だけど本当はその背景に何があるかって、それに対して自分が何を感じたかって自分なりの考えを述べるのが大事なはずなのに、そうすると先生の採点が難しくなるのですよ。だから日本の教育っていうのはほとんど暗記になってしまったのではないですか。

A委員 それはですね、今から廻してお見せしますがK県の高校入学試験を変えようと思っているのです。今日お持ちしたのは社会科の試験問題なのですが、3つの表を関連付けて意見を述べるようにという問題です。こういう問題がもう出てきています。高校入試は変わり始めています。

もう少しいますとね、来年のK県の募集要項なのですが、ある実技試験の学校です。共通科目ですが、試験ですよ。反復横跳びとエアロバイク。普通科スポーツリーダーコースっていうのをやります。

委員長 うちの大学で眼力入試って話をしたのだけど、生徒を見て能力を見つけられない先生は本当の先生じゃないと。ところがみんな眼力がなくなってしまった。人間を見る目、育てる目を持たなくなったとたんに教育はダメになってしまった。それはセンター試験もそう。

M委員 先生たちはみんな一生懸命にプログラムを立てて、その通りにいくと安心するのです。でも、そこから違った反応を持つことをダメだとしてしまう。

うちの園の子どもたちが亀を飼っているのです。「亀吉」と呼んで雄だと思っていたのが 10 年くらい経って卵が生まれたのです。子どもたちが 1 匹じゃ可哀想だと言った時に、私はこんなところで亀を見つけるのは難しいのでペットショップで買えばいいと思っていた。ところが子どもが「亀がいる川があるから

取りに行こう」と言って、今度は「手で取るのが怖い」と言う子がいるから話し合っけてバケツを持っていこうとなった。思ってもみないことが起きる中で、私たちは今、子どもたちに何を伝えていくかは水面下でキチンと捉えながら、保育者も子供も楽しく乗っていけばいい。そういう事がもっと広がっていくと楽しいだろうなということですよね。

A委員 そうです。それは幼稚園の時ですね。発達の段階によって中学校ではそういう話にはならないですが、その発想ですべてのことをやっていくということです。

委員長 脱線してしまいますが、磐田市の中学校の校長先生がおっしゃったのですが、その校長先生は幼稚園・保育園から小学校、中学校の連携教育を進めているのですが、その中で一番ショック受けたのは幼稚園と小学校の教育だと言いました。「あれが本当の教育だ」と言うのです。

上に行くほどちゃんとした教育ができていない。大学が一番ダメですね。大学なんて行かない方がいいのではないかと言いたくなる。

いろんな話題が出てきました。教育振興基本計画（案）については基本的には良くできているという皆さんのお言葉でもありますから、今日の意見を入れて、事務局に調整をしてもらえればいいと思います。上手くみなさんの意見を活用してください。

先ほどの教え方の問題なのですけどね、「藤枝メソッド」というのを作れないのですか。世界中から見に来たくなるような藤枝の教え方。なぜかと言うと、私の大学でもやっているのですけど「SSU メソッド」静岡産業大学方式。みんな見学に来るのですよ。文科省も見学に来ます。私の大学の先生の教え方を「SSU メソッド」に変えて10年です。これは将来的には売りものにしようと思っています。まだ確立はしていませんが、この教え方「ティーチングメソッド」って欲しいと思う。将来、欲しいと言われたらお金を取ろうかと思っている。

A委員 実は、藤枝の小学校、B委員が校長先生されていた学校では他県から教頭会がバスで60人見に来ている。私が東京や神奈川、さっき言った大阪、広島、福岡、和歌山でしゃべっているのは、藤枝市のある小学校で13年前からやってきたメソッドがあるのです。それは教育のカリキュラムじゃなくて「学び方のカリキュラム」です。これは日本一だと思うのです。だけどメソッドを作るのは時間がかかります。大体言葉で言うと「築城3年」なのですね、でも「落城3日」です。人が変わると変わります。だからそこをどういう風に継続的にやっていくのかと考えた時に、学び方のメソッドとして発信したい。お金を取って

もいいくらいです。

B委員 それが教育振興基本計画（案）の施策にも入っている「聴いて、考えて、つなげる」授業です。

委員長 これは宣伝した方がいいです。教えてくれと言われたら「1回いくら」として、それで集まったお金を奨学金にしてもいい。

B委員 A委員が昨年と今年の8月に市の施策の1つとして市内の教員に講演して下さった。100人以上の先生が学びました。その授業が藤枝市全体に広がる中心となった学校があるのですが、ここで育った先生たちが市内の各学校に異動になり、そこで「聴いて、考えて、つなげる」授業を目指して頑張っている。中心になった学校の火が消えてしまいそうだとA委員はおっしゃいましたが、そこだけじゃなく市内の各学校の先生たちもそれを受けて日々の授業の中にとり入れている。学校として取り組んでいるところもあります。

小学校では「聴いて、考えて、つなげる」授業によって、子どもたちが本当に主体的に自分の考えを説明しようとするようになりました。そして友達の意見を分かろうとして聴きます。「温かく聴く、優しく話す」というA委員の教えのなかで学んだことです。今はそれを中学校にもつなげようとしています。

「聴いて、考えて、つなげる」授業では、「授業が分かる」ってことを大切にするので、やっぱり「分かる」と授業が楽しくなるのですよね。ですから、これが藤枝の授業の形だと思います。

A委員 B問題の成績はあがりませんか。

その方式でやっている沼津の学校は、B問題で沼津のトップ校になりました。なるはずなのです。

B委員 そうですね。私がいた学校に先生が入ってくださった時ですが、B問題の成績が良かったです。B問題にあるような活用する力、習得した知識を活用する学習を日々の授業の中でやっていくと、やはりB問題のところが力が子どもたちにつくのかなと思いました。積み重ねていけば確実にその部分、今求められている力はあると思います。

委員長 ぜひ、藤枝のメソッド。学び方のメソッドが欲しいですね。日本一になるための環境です。教育っていろいろな捉え方があるのですが、私は産業界にいた時に、黒人にいろんなこと教えていたことがあるのです。教え方によって生

産性がすごく上がるのです。ラーニングカーブ、学習曲線がグッと上がります。それも「教え方」と言うよりも「学び方」ですね。いかに学習曲線を上げるかということが教育においてどれだけ重要かということをも日本人はあんまり感じていない。1年かかるところを3か月間で学ぶ、1週間で身につける。そういう方法なら学んだ方はハッピーなのです。1年もかかったら、その間は給料が上がりにませんか。

藤枝の人が教えると早くいろんなことがわかるというのはハッピーになれる。ここに書いてあるように分かるってことは楽しい。逆に、なかなか分からないということはアンハッピーですよ。

F 委員 今の新しい形の授業の話は、最初の方の会議でちょっとお話しましたが、もっと最初に詳しく聞いておけば良かったと思っていますが、そういう日本もあるのです。もっと伸ばしていければいいですね。

C 委員 学校の教育に話題が集中してきましたけど、確かに、これまでは知識的能力、「覚える」ということが中心だった。しかし、新しい時代の教育とは何だろうと、方法的能力といいますかね、問題の解決のために条件を探し出したり比べたり順序をつけたりする。算数・数学で言うと答えは出てしまっている、どのようにこの答えを導き出したのかという、そういう時代に入っているということですよ。

人工衛星にしても何でもそうですが、仮説を立てて、目標までの方法を導き出す。A委員も申されましたけど国語では物語中心主義ですよ。場面場面を区切って主人公はどんな気持ちだったなんて毎回聞いていたら物語自体の面白みがなくなってしまう。そういう意味ではマニュアルに従ってやっていけばいいのではなくて、先生には枠をはみ出してもいいから工夫してほしい。

以前にも申し上げましたが、自分の専門は国語・英語ですけど数学を受け持たなければならない時がありました。中学3年生にピタゴラスの定理をどう教えたらいいか、ついマニュアル本を見たくなくなったが、私はテニスコートに3メートル、4メートル、5メートルのロープを持って行って授業をやりました。遠足では道を歩かない遠足を、体育ではボールを使わないサッカーをやってみようと子どもに投げかけました。

私は枠を超えてもいいから真髄に近づく工夫をして子供たちに解決の道を導きださせる。それが問われているのではないかな。

低学年で、授業の終わりに「はい、今日勉強したことを自分の言葉で自分なりに書いてごらんさい」と言う先生がいるのです。「自分の言葉で自分なりに」とはいい加減に書いていいということ。こんな無責任な授業を今でもやってい

るところもある。「初めに・次に・だから」と3段論法などあります。そういうキーワードだけ与えて使わせる。そういう言葉を与えない限り子供っていい加減なことする。ちょっと専門的なことになって大変申し訳なかったですが。学校の教育で言えばそんな風に新しい時代を迎えなきゃならないと思っています。

委員長 ありがとうございます。新しい時代の教育って本当に私も絶えず大学でみんなと考えています。本当に時代の大転換期です。それをみんな認識しないとダメだと思う。

みなさんは、割り算の九九を知っていますか。今は九九というと掛け算だけでしょ。割り算の九九なんて教える必要がなくなった。そのうちに掛け算の九九も教える必要がなくなるのではないか。そういう風に未来では何が必要かって考えないと不必要なことを一生懸命勉強してしまう。そういうものがたくさんあると思います。私の場合だと、あんなに勉強したのに社会に出てから使っていないものは歴代天皇の名前です。神武天皇から明治天皇まで全部暗記させられた。暗記しないと卒業できない。

今でも必要ない物を一生懸命教えているなんてことがあるのではないですか。

A委員 ありますね。古典の文法なんかは最たるものですね。

委員長 「それは教養として知ってなきゃいけないよ」と言う人もいるかもしれないけど、もっと必要なものがあると思う。だからこの際に本当に何が必要かってことを考えてみる必要があると思うのです。

最近でみんなが混乱したことで言うと円周率。私は混乱しなかったのですが、円周率は3.14まで覚えなきゃいけないなんて言うけど、どれだけの人が卒業してから使うのですか。使うとしたら学校の先生と建築関係の人で、それ以外の人はみんな使ったことがない。

今日は大変いい議論があったと思うのですが、未来をどうするかというテーマについてA委員からご指摘いただいて、全体としても言うべき意見は出せたのではないかと思います。この後、事務局には会議の意見を踏まえて教育振興基本計画をしっかりと修正していただきたいと思います。しばらく時間が空きますが、まとまったところでまた委員のみなさんに提示していただきます。